

第15回昴コンサート 歌詞曲目解説

ステージⅠ

愛と平和よ 輝け！

アメイジング・グレイス

山ノ木竹志 黒人霊歌
日本語詞

元は18世紀のイギリスで作られたキリスト教の賛美歌で、“奇しき神の恵み”とでもいう意味です。今回はよく知られた詩でなく、地球に生命が生まれて人類に進化し現在に至る壮大な歴史と悠久の未来を見つめる山ノ木竹志の詞と、昴のピアニスト森二三の斬新な編曲で、明日に生きる昴の思いを力いっぱい歌います。

海に生まれ 旅をつづけた
みどり深き 森を抜け
幾千万の月日 重ねて
我ら人類(ひと)と成りぬ

人間(ひと)に生まれ 旅をつづけた
果てなき荒野 さまよい
幾千万の生命(いのち)流れて
我ら この地に 在り

恐れ知らぬ 愚かな旅人
戦さ 憎しみ 涙
幾千万の試練 超えて
我ら 共に 立つ

恵み深き みどりの大地
惑星(ほし)よ 海よ 森よ
幾千万の生命 育み
救いたまえ 我ら

幾千万の生命 照らして
共に 歩みたまえ

すこしずつ

門倉 諫 作詩
信長 貴富 作曲

うたごえ運動のなかでもたくさん歌われてきた門倉諫の詩に、信長貴富が作曲した作品。季節のかすかな移ろいの中に感じられる自然の厳しさや美しさを歌う中に、さりげなく平和への強い思いや確かな決意が込められています。

すこしずつ すこしずつ
春の雪形ゆめにあたため
冬芽の指は 風をさがす

すこしずつ すこしずつ
星座の形つなぎあわせ
地上の闇を 胸にとかして

すこしずつ すこしずつ
だれの目にも 風の虹や
耳にとどく 雲の波紋

すこしずつ すこしずつ
時代の川に姿を映し
歴史の空がすきとおるよう

うた

村上 昭夫 作詩
信長 貴富 作曲

「歌をうたうのに大切なことは、完璧さや美しさではない。思いのままに素直に歌うことと、苦しみを乗り越える勇気や意思を持つことだ。」作者の歩んできた人生の苦悩から生み出された熱い思いが、「だから私は歌う」という言葉の中に秘められており、私たちの心に深く染みこんできます。

高い声でうたう必要はない
小雨のように
地をぬらしてゆけばいい

きれいな声でうたう必要はない
しゅう雨のように
空のわずかなすき間を
通り過ぎればよい

だから私はうたう
荷を負った口バの涙のような声
ぬれた地と色づいた空の間に
だんだん疲労してくる
私をかかえながら

寺山修司の詩による6つのうた 思い出すために より

寺山 修司 作詩
信長 貴富 作曲

思い出すために

曲集の表題曲。

寺山修司の独特で個性的な詩と信長貴富によるジャズフルツっぽい大人な雰囲気曲調。

今まで歌ったことのない複雑なリズムや音の重なり、高齢者の多い昂は四苦八苦しました。挑戦する昂の姿をご覧ください。

セーヌ川(岸)の
手まわしオルガンの老人を
忘れてしまいたい

青麦畑(あおむぎばたけ)でかわした
はじめてのくちづけを
忘れてしまいたい

パスポートにはさんでおいた
四つ葉のクローバ 希望の旅を
忘れてしまいたい

アムステルダムのホテル
カーテンからさしこむ 朝の光を
忘れてしまいたい

はじめての愛だったから
おまえのことを
忘れてしまいたい

みんなまとめて
今すぐ
思い出すために

種子(たね)

曲集の終曲。

短調から長調に転調して熱く歌われるクライマックスと、そんな中にも滲む孤独の闇……。ピュアで繊細な寺山修司の世界が広がります。

きみは
荒れはてた土地にでも
種子(たね)をまくことができるか?

きみは
花の咲かない故郷の渚(なぎさ)にでも
種子をまくことができるか?

きみは
流れる水のなかにでも
種子をまくことができるか?

たとえ
世界の終わりが明日だとしても
種子をまくことができるか?

恋人よ
種子はわが愛

このみち

金子みすゞ 作詩
石若 雅弥 作曲

小さな虫や魚などあらゆる命あるものに対して、
限りない優しさを詠った作品を数多く残した金子
みすゞ。この詩からもその温かい思いが伝わって
きます。

このみちのさきには、
大きな森があろうよ。
ひとりぼっちの榎(えのき)よ、
このみちをゆこうよ。

このみちのさきには、
大きな海があろうよ。
蓮池(はすいけ)のかえろよ、
このみちをゆこうよ。

このみちのさきには、
大きな都があろうよ。
さびしそうな案山子(かかし)よ、
このみちをゆこうよ。

このみちのさきには、
なにかなにかあろうよ。
みんなでみんなで行こうよ、
このみちをゆこうよ。

リメンバー

なかにし 礼 作詩
鈴木キサブロー 作曲
金井 信 編曲

オペラ歌手佐藤しのぶ唯一のオリジナル作品。

チェリノブイリの放射能被害にあった子ども
達を励ますため、現地を訪れ、被爆国である日本
人の反戦の思いを、音楽という共通の言葉で世界
に伝えたいという強い信念で、なかにし礼に作詞
を依頼して創られたのがこの曲です。

「私は種をまきました。これが広がって、歌わ
れていくことを願っています。」

この 地球を 宇宙から ながめたら
美しい 青い星だ
国境は引かれていない

今も どこかで 戦争は つづいてる
悲しみと 山のような 屍(しかばね)が 折り重なって

戦争と 核兵器のない
平和の 実現を 願う 人は集まれ!

リメンバー ヒロシマ・ナガサキ
過ちは繰り返さない
リメンバー ヒロシマ・ナガサキ
人間に英知と愛があるなら

愛と平和 自由を 私たちにください
愛と平和 自由を 私たちにください

遠くとも 核なき世界を 目指して
手をつなぎ みんな歩きはじめよう

リメンバー ヒロシマ・ナガサキ
沈黙にさよならしよう

リメンバー ヒロシマ・ナガサキ
行動と勇気で生まれ変わろう
愛と平和 自由を 私たちにください

ステージⅡ 男声合唱のためのヒットメドレー「LOVE」 より

三沢 治美 編曲

時代・世代をこえて愛される名曲で、詩もメロディも美しく情景を伴いドラマチックな曲のメドレーです。誰もが一度は耳にした名曲が、合唱という形で多くの人々の心に届くよう編曲されています。

ゴンドラの唄

吉井 勇 作詞
中山 晋平 作曲

1915 年(大正 4 年)に発表された歌謡曲で、大正時代に松井須磨子が歌って以来、百年以上にわたって親しまれ歌われて来ました。

いのち短し 恋せよ乙女
朱き唇 褪せぬ間に
熱き血潮の 冷えぬ間に
明日の月日の ないものを

東京ブギウギ

鈴木 勝 作詞
服部 良一 作曲

1947 年に発表された、笠置シズ子のヒット曲です。終戦から復興に向かう日本を象徴する流行歌として知られています。

東京ブギウギ リズムうきうき
心ずきずき わくわく
海を渡り響くは 東京ブギウギ
ブギの踊りは 世界の踊り
二人の夢の あの歌
口笛吹こう 恋とブギのメロディー

燃ゆる心の歌 甘い恋の歌声に
君と踊ろよ 今宵も月の下で
東京ブギウギ リズムうきうき
心ずきずき わくわく
世紀の歌 心の歌 東京ブギウギ
歌え踊れよ ブギウギ

恋のバカンス

岩谷 時子 作詞
宮川 泰 作曲

1963 年に発表され大ヒットしたザ・ピーナッツの定番曲。歌謡曲にはないスウィング感に満ちあふれた曲で、現在も幅広く各世代で歌われています。

ため息の出るような
あなたの くちづけに
甘い恋を夢見る 乙女ごろよ
金色に輝く 熱い砂の上で
裸で恋をしよう 人魚のように

陽にやけた ほほよせて
ささやいた 約束は
二人だけの 秘めごと
ためいきが出ちゃう
ああ 恋のよろこびに
バラ色の月日よ
はじめて あなたを見た
恋のバカンス

瀬戸の花嫁

山上 路夫 作詞
平尾 昌晃 作曲

1972 年に小柳ルミ子が歌った瀬戸内海を代表するいわゆるご当地ソングです。1989 年に NHK が放送した「昭和の歌・心の歌 200」では 7 位にランクされ、昭和を代表する歌として知られています。

瀬戸は日暮れて 夕波小波
あなたの島へ お嫁に行くの
若いと誰もが 心配するけれど
愛があるから 大丈夫なの

だんだん畑と さよならするのよ
幼い弟 行くなと泣いた
男だったら 泣いたりせずに
父さん 母さん 大事にしてね

ステージⅢ うたごえ一筋 命の限り 千秋昌弘 リロステージ

Che gelida manina 「冷たき手を」
オペラ「ボエーム」第1幕から
ブッチーニ 作曲

1896年イタリア・トリノで初演されたオペラ「ボエーム」は、1830年頃のパリが舞台、芸術家の卵4人と2人の娘の愛と悲しみの物語。第1幕で歌われる詩人ロドルフォの恋の思いを打ち明けるアリアです。

なんて冷たいかわいらしい手！
わたしに暖めさせて下さい。
捜してなんになるんですか？
こんなくらやみでは見つかりっこありません。

でも幸いなことに、今晚は月夜で
ここに、わたしたちのそばに月がいるのです。

待って下さい、お嬢さん
わたしはほんのひとことで
自分のことをお話ししたいのです。
わたしがだれで、何をしていた、
どう生活しているかを。
よろしいでしょうか？
わたしはだれでしょうか？ わたしは詩人です。
何をしていたかって？ 書いているんです。
どう生活しているのかって？ 生きているのです

わたしの楽しい貧乏の中で
愛の詩と歌は王侯のように
惜しみなく費やしています。
夢と空想と、空に描くお城のおかげで
わたしは百万長者の
心を持っているのです。

ときどきわたしの宝石箱から
二人の泥棒が
宝石を全部盗んでしまうのです。
美しい目という泥棒が。

たった今も、あなたと一緒にはいってきて
わたしのいつもの夢
わたしの美しい夢は
即座に消え失せてしまいました。
しかし盗まれたことは、少しも悲しくありません。

なぜかって言えば、そこは
優しい希望のすみかになったからです！
さあこれでわたしのことがお分りになったのだから
あなたが話して、お願いだから話して下さい！
あなたはだれですか？
よかったら話していただけますか？

(訳・増井敬二)

Jupiter

組曲「惑星」より

岩谷 時子 作詞
ホルスト 作曲
金益研二 ピアノ伴奏アレンジ
森 二三 編曲

1914年頃にホルストによって作曲された組曲「惑星」の第4曲、日本語詞は岩谷時子が作詞をして、本多美奈子が歌った。

あたしに 涙ふかせて
泣きたい時には 泣きましょう
かなしみ知らない人は いない
嘆き乗り越えて 生きて行くの
空を見あげて 船を出しましょう
しぶきあげながら 空見上げよう
はるか彼方に 星がある
闇にかくれてる あの星こそ
暗い夜空の 王様
あなたを守る星よ 木星ジュピター

やがて明るい朝が おとずれ
地球の上の 夜が明けるわ
あなたは ほほえみ浮かべ
あしたから 新しい人生よ

かなしみ知らない人は いない
嘆き乗り越えてゆく 平和な世界を
みんな 手をつないで生きて行こう

忘れてはならない

千秋 昌弘 作詩
森 二三 作曲

二十世紀が 戦争の世紀だったことを
忘れたり 知らなかったりしてないだろうか
今もなお 容赦なく 砲弾を
病院 学校 避難所に撃ち込んでいる

忘れてはならない 知らねばならない
殺し合うことが いつの世も許されないことを
戦争は終わっても 生きる苦しみを与える

忘れてはならない 知らねばならない
殺し合うことが いつの世も許されないことを
忘れてはならない

戦争が 今もまだ 動き出そうとしている
何年経っても 戦争が 許されないことを
忘れてはならない 忘れてはならない

澄んだ瞳

千秋 昌弘 作詩
森 二三 作曲

子供の瞳に 瞳を合わせ
おはよう こんにちは あいさつする
手を振りながら 答えてくれる

子供の瞳に 澄んだ瞳
言葉が無くても 笑顔がいっぱい
手を振りながら 答えてくれる

友だちになるのに 言葉はいらない
すべての人に 子供のように
澄んだ瞳で おはよう こんにちは 明るい明日へ
澄んだ瞳で おはよう こんにちは 平和な未来へ
平和な未来へ 平和な未来

ヒロシマ少女の叫び

千秋 昌弘 作詩
森 二三 作曲

広島市への原子爆弾投下の朝、似島検疫所が臨時の野戦病院として使用され、1万人とも言われる被災者が似島に運び込まれた。跡地に立ち、経験者の話を聞き、千秋がなんとか話を残したいと、詩を書きました。核兵器のない世界を願い、歌います。

ヒロシマ 傷ついた人が
次から次へと 似島(にのしま)野戦病院へ

壊疽(えそ)で やられてしまう
とにかく 切断
何の 病気が わからぬ
麻酔で 切断
窓の外に 積み上げた 手と足の山

どれほど 時間が過ぎたのか
麻酔は すでに 使い果たした
一人の少女が 運ばれてきた
麻酔は無いが 切ってください
私は 生きたいの

耳を つんざく 少女の叫び
何年たっても 消えることはない
少女の叫び 今も 聞こえる
少女の叫び 世界に届け
ヒロシマの 少女の叫び

109台のベビーカー 平和の種となって

千秋 昌弘 作詩
森 二三 作曲

今から3年前、大国ロシアは、ウクライナへ侵略し、レビューにミサイルを撃ち込みました。そして、109人の小さな子供たちの命を奪ったのです。

109台のベビーカーを市庁舎前の広場に並べ、抗議の意思表示をしました。

昂と一緒に、ウクライナに1日も早い平和を願いながら歌います

あの日から ひと月
大国の侵略は 西部まで
リヴィウの町に
空っぽになった 109台のベビーカー
ママ泣かないで
私たちは みんな仲良く いい子でいるよ
ベビーカーで ママと
手をつないで 遊びに行きたいよ

三年が過ぎ まだ 戦争は続いているよ
祈っているよ 祈っているよ
もう こんなことがないように
祈っているよ 祈っているよ
春風が 平和の種 蒔いてくれるよう
そして 平和の芽が 元気に育ち
どの国にも 吹きわたれ
世界中に 吹きわたれ
空高く

ステージⅣ 荒木 栄(生誕100年)を歌う

ひとつ星のうた

荒木 栄 作詩・作曲
森 二三 編曲

職場合唱のはなやかなりし頃、詩人宮沢賢治の童話“ひの木とひなげし”を自分たちの手でオペレッタにして上演したときの作品。“落日のうた”とともに独唱曲として歌われました。

わたしは青い ひとつ星
すみれの空の ひとつ星
銀のお舟に 銀の星
やさしい天使の ゆめをのせ

ゆらゆら雲の 海をこぐ
わたしは青い ひとつ星
すみれの空の ひとつ星

炭鉱ばやし

淀川 正 作詩
荒木 栄 作曲

1953 年、第1回九州のうたごえ祭典で発表し、大好評を受けた曲。炭坑音楽コンクール1位の詩に作曲した、荒木栄初期の曲です。

- 1 堅坑(たてこう)な一
堅坑やぐらに朝日が映えりゃよ
今日もお炭山(やま)はね!
今日もお炭山は日本晴れ
*さあさ歌およ 炭鉱ばやし
ストントロッコヨウイヤナ
ヨウイヤヨウイヤナ
- 2 石炭(すみ)はな一
石炭はどっさり 掘り手は若いよ
マイトドンとくりゃね
マイトドンとくりゃ血がたぎる
*くりかえし
- 3 キャップな一
キャップランプはあの娘がくれたよ
伊達にゃ下らぬね
伊達にゃ下らぬ二千尺
*くりかえし

4
色がな一
色が黒いと嫌(きろ)てはならぬよ
男千両のね一
男千両の石炭(すみ)化粧
*くりかえし

5
仕事な一
仕事自慢できたえた腕がよ
やがて日本をね
やがて日本を興(おこ)す腕
*くりかえし

(1 番、5 番を歌います)

仲間のうた

大江 将精 作詞
荒木 栄 作曲
森 二三 編曲

1960 年冬、「三池闘争」の終結後、仕事を再開した三池労働者には過酷な差別と重労働がかぶさり、闘争再開の気分がふたたび労働者の胸に蘇ってきました。珍しく降った雪に、炭坑労働者の心をうたった上山田炭坑の詩人大江氏の詩により、炭坑労働者の不屈の闘いの心をはげます気持ちで作られた歌です。

1
重たい雪を 真白にかぶった
あの炭坑(やま)にも この街にも
そのどこかで どこかで
春を待つ 準備をしている
小さい草たちが 草たちがいるよ

2
嵐吹いて うちたたいていった
あの炭坑にも この街にも
そのどこかで どこかで
春を呼ぶ 準備をしている
一人一人の 仲間がいるよ

3
泥の靴が 踏みにじっていった
あの炭坑にも この街にも
そのどこかで どこかで
花咲かす 準備をしている
仲間のうたごえが うたごえがするよ

地底のうた<序章>

荒木 栄 作詩・作曲
本並 美徳 編曲

1959 年から始まった「三池闘争」を描いています。この闘いには全国から延べ 10 万人もの労働者が支援にかけつけ、日本の労働運動史上に残る闘いでした。

荒木栄によって、282 日に及んだ 三池闘争現場の 生々しい声を集めて作られた、序章と 4 つの楽章からなる男声による組曲です。

有明の海の底深く
地底にいとむ男たち
働く者の火をかがげ
豊かな明日と平和のために
たたかい続ける
革命の前衛 炭鉱労働者

(序章を歌います)

草競馬

妹尾幸陽 訳詞
フォスター 作曲
荒木 栄 編曲

誰もが知っているフォスターの「草競馬」です。荒木栄といえば働く人を励ます力強い作品のイメージが強いのですが、彼の幅広い音楽活動の意外な一面を示す貴重な編曲作品です。厳しい労働環境の中で、ちょっとした息抜きで気軽にハモれるように作ったものでしょうか。

1. 田舎の競馬場 ドゥダー ドゥダー
まわりは五マイル おお ドゥダ デー
帽子はもみくしゃで ドゥダー ドゥダー
あるのはバラ銭ばかり おお ドゥダ デー
* 夜(よ)も昼も かけまわる
金をかけたよ青(あお)に 人は栗毛に
2. 尾長の牝馬(めうま)はドゥダー ドゥダー
ぶつかりあわてて おお ドゥダ デー
ぬかるみ穴へと ドゥダー ドゥダー
口惜(くや)しや落ちたよ おお ドゥダ デー
(*くりかえし)

どんと来い

荒木 栄 作詩・作曲

1959 年、荒木栄が病床で作った。
三井鉱山が企業再建の名目で数千人の解雇を打ち出したと聞いて「どんと来いだ！」と胸を叩いたという。

同年熊本開催の九州のうたごえ祭典で、熊本県民謡「おてもやん」のリズムを取入れ、朗唱から始まるこの歌は、首切反対の大合唱となり安保闘争テーマソングのように全国に広がった。

「資本家どもあ わがどんばっかり
しこたまもうけて 知らん顔
投資はするくせ 不景気ちゅうて
首切り賃下げ やり放題」

- 1 みんなあつまれ 腕をくめ
炭鉱マンも 鉄道員も
化学の仲間も 日雇いも
企業合理化はね返そう オウ！
ドンと来い はね返そう
ドンと来い 見せてやろう
働く仲間の団結を ソレ団結を

「あっちこっち 基地のあつとに
独立平和ちゃ おかしきパイ
共同防衛 海外派兵で
ミサイル 水爆 おだぶつタイ」

2

みんなあつまれ 腕をくめ
労働者も 農民たちも
中小企業も インテリも
安保条約うち破ろう オウ！
ドンと来い うち破ろう
ドンと来い 見せてやろう
闘う仲間の団結を ソレ団結を

花をおくろう

(神谷国善・宗利周子 におくる)

森田ヤエ子 作詩
荒木 栄 作曲
森 二三 編曲

数々の愛唱歌を生み出したこのコンビには、仲間達の祝婚歌も多い。この歌もうたごえ運動に参加していた仲間の結婚によせたもの。

吹雪の夜を歩いてきた
ぬかるみを飛びこえてきた
日照りにたたかれてきた
嵐の夜を走ってきた

手を取り合って歩いてきた
ふしくれだった荒れた手に
ふるさとをつくる仲間の手から
花をおくろう オレンジの

沖縄を返せ

全司法福岡高裁支部 作詩
荒木 栄 作曲
森 二三 編曲

1956 年、沖縄代表が初参加した第 4 回九州のうたごえ祭典で発表され、創作コンクール大衆投票で 1 位に選ばれた歌。沖縄祖国復帰の闘い支援を全九州合唱団会議が呼びかけ、全司法福岡高裁支部で創作。その後荒木栄に行進曲風に改作してもらい、現在の形になった。

かたき土を 破りて
民族のいかりにもゆる島
沖縄よ
我等と我等の祖先が
血と汗をもて
守りそだてた沖縄よ
我等は叫ぶ 沖縄よ
我等のものだ 沖縄は
沖縄を返せ
沖縄を返せ

星よお前は

荒木 栄 作詩・作曲

間宮 芳生 ピアノ編曲
森 二三 編曲

作者が指導した大牟田地域の「水曜コース」の会員が結婚して東京に移ることになった。遠く離れていても仲間としていつも励まそうというあたたかい気持ちを込めて、結婚の席上で贈った曲。

1

星よお前は 知っているね
ともに楽しくうたっていたが
仲間はなれて 仲間はなれて
遠くへ行った
瞳まどかな 瞳まどかな
あの友のこと
星よお前は 知っているね

2

風よお前は 知っているね
はるか都で働く友が
郷里(くに)の仲間を 郷里の仲間を
想い出しては
いつも元気で いつも元気で
うたっていること
星よお前は 知っているね

3

みんなみんな 知っているね
離れ離れになっではいても
星や風が 星や風が
呼びあう歌を
仲間どうしが 仲間どうしが
よび合う歌を
みんなみんな 知っているね

心はいつも夜明けた

永山 孝 作詩
荒木 栄 作曲
森 二三 編曲

1961 年九州のうたごえ祭典創作第 1 位。同年の日本のうたごえ祭典で発表。原題は「心には夜はない」、うたごえ実行委員会の意見としてよりよく確信を語る題として現在の題名になった。

1

夕陽がよごれた工場の屋根に
沈めばおれたちゃ街に散らばる
若ものや娘たちの胸に灯をともしに
心には夜はない いつも夜明けた
心には夜はない いつも夜明けた

2

朝日がよごれた工場の窓を
照らせばおれたちゃ職場に散らばる
「オッス！ おはよう」
若ものや娘たちの胸がくもらぬよう
心には夜はない いつも夜明けた
心には夜はない いつも夜明けた

夕陽は朝陽は働く仲間
 「そうだ！ 今日もがんばろう！」
 やがて展げる未来を照らす
 若ものよ娘たちよ胸に誇りをもとう
 心には夜はない いつも夜明けた
 心には夜はない いつも夜明けた

わが母のうた

森田ヤエ子 作詞
 荒木 栄 作曲
 森 二三 編曲

荒木栄の絶筆。内容的にも音楽的にも荒木栄を代表するこの歌は、作曲者の死の二ヶ月前、当時大牟田自労たごえ行動隊責任者の還暦を祝っておくられたもの。

- 1
 雑草(あらぐさ)の実がうれて
 土深く芽生える朝に
 ああ わが母こそ太陽
 闘いを育てる太陽
- 2
 雑草のたくましさ
 踏まれても伸び広がって
 ああ わが母こそ太陽
 闘いを育てる太陽
- 3
 雑草の花のすがしさ
 いちはやく迎える春を
 ああ わが母こそ太陽
 闘いを育てる太陽
- 4
 雑草は私たち
 闘いに深く根ざして
 ああ わが母こそ太陽
 闘いを育てる太陽

がんばろう

森田ヤエ子 作詩
 荒木 栄 作曲
 森 二三 編曲

1960 年、三池闘争の最も激烈な段階に直面した労働者が、右手のこぶしを突き上げて「団結がんばろう！」と叫んだ。その吹き上がった闘魂をとらえて作曲されたこの曲は、以後あらゆる労働者の闘いの合言葉として歌われている。

この歌は「夫の闘争を支えるのでなく、もはや堂々と一緒に闘う」ようになった炭鉱の女性たちも描き、荒木栄(労働者作曲家)は詩を読んだ翌日に歌を大牟田センター合唱団に持込み瞬く間に全国に広がった。

- 1
 がんばろう！ つきあげる空に
 くろがねの男のこぶしがある
 燃え上がる女のこぶしがある
 闘いはここから 闘いは今から
- 2
 がんばろう！ つきあげる空に
 輪をつなぐ仲間のこぶしがある
 おしよせる仲間のこぶしがある
 闘いはここから 闘いは今から
- 3
 がんばろう！ つきあげる空に
 国のうちそとのこぶしがある
 かちどきをよぶこぶしはひとつ
 闘いはここから
 闘いは今から 「おー！」

お断り：作曲の都合上、元の詩から省かれているフレーズや、加えられている歌詞もございます。元の詩がある場合は、元の詩を、それ以外は歌詞を載せました。

あしからずご了承ください

こうや
 神谷 国善 「花をおくろう」を贈られた
 間宮 芳生 「星をお前は！」ピアノ編曲者
 みちお

のお二人は昨年暮れ相次いでお亡くなりになられました。ここに、謹んでお悔やみ申し上げます。 合掌